

# 伝通院の供養塔

大正大学教授 玉山成元

一步境内に入ると世間の雑音が消える。桜のトンネルを抜けると、眼前に美しい本堂がせまる。ここを左折して墓地内に入り、銀杏の前を進むと、右側に桜の木が見える。この木の下に開山聖岡上人をはじめ、歴代住職の大きな卵塔が並ぶ。卵塔の前を奥に進むと、左後方に祐天上人のお名号が彫られた供養塔がある。正面に「為断 殺害亡者千五百人菩提」とあり、右下方に「信心之施主武江城下」左下方に「鶉飼十郎右エ門尉義真」とある。左右の側面には「南無阿弥陀仏 祐天(花押)」と同じ名号が彫られ、後面には中央に、元禄十三年(一七〇〇)七月十八日、西信寺皓誉典恕上人のとき建立したことと、「通誉文徹居士 義真」、「心誉貞三信女 妻」と夫婦の法名が彫られ、さらに右側に、伝通院十七世祐天上人をお願いし、宝永六年(一七〇九)五月十二日、西信寺から伝通院に移したことが彫られている。つまり鶉飼義真は、首をはねた千五百人の菩提を弔うために、元禄十三年西信寺に供養塔を建てたが、そ

の後祐天上人が伝通院の住職となったので、宝永六年に移されたことがわかる。これよりさき応永二十二年(一四一五)増上寺開山聖職上人は、戦乱で荒れた常陸国で苦勞を続ける恩師の聖岡上人を氣の毒に思い、江戸に出て余生を送るよう勧めた。瓜連常福寺の復興も目処がついた聖岡上人は、弟子の了智上人に寺を譲って江戸に上り、小石川の寿経寺に入った。その後、寿経寺は衰いたが慶長七年(一六〇二)徳川家康の生母お大の菩提寺となり、法名にちなんで伝通院と改められた。慶長十三年には大規模な伽藍も完成し、拡張されて設備もとのい、住職には廓山上人が選ばれた。上人は増上寺から三百人の所化を連れて入寺し、若い僧侶の修行する檀林寺院となった。貞享三年(一六八六)増上寺から牛嶋に隠遁して念仏生活を続けていた祐天上人は、徳川綱吉の母桂昌院の帰依をえて、元禄十二年生実大巖寺(千葉市)の住持となった。翌年には飯沼弘経寺の住職となり、宝永元年伝通院の住職となった。

そして増上寺門秀上人らと同様の待遇を受け、江戸城にも呼ばれてもてなされたが、相変わらず庶民との結びつきは固く、多くの人々から生き仏として尊敬された。『遊曆雜記』という本に供養塔の話がのっている。それによると、文京区小石川火の番町の南へ入った横丁を砂利場といった。この細小路の中段東側に与万鶉飼義真の屋敷があった。特別変った構えでもなく、四間半の門構えに葦草の長屋門があり、その門の桁に鶉飼家の紋がついていた。大名ならともかく、与力の身分で定紋をつけるのは何か理由があったのであるうか。賑やかなところなら評判にもなるうか、砂利場は辺鄙なところであるから噂もたたなかつた。

鶉飼家の先祖は首斬役で、生涯の間に数千の首をはねたといわれる。いつのころか京都嵯峨二尊院の釈迦如来が音羽の護国寺でご開帳下れた。そのとき鶉飼義真も参詣して礼拝したが、仏体は雲霧でかくしたようになり拝むことができなかつた。どうして自分だけは拝めないの

## 伝通院の供養塔

大正大学教授 玉山成元

あろうか。義真は心の底から罪の深いのを恥じて帰宅した。そして水垢離をとり精進潔斎したうえ、また護国寺にゆき、ご開帳の仏像を拝もうとしたが前と同様に拝むことができなかった。そこで義真はいよいよ罪業の深いことを悔み、「今生においてすら靈仏を拝むことができないのに、どうして極楽などに往生することができようか」といつてがっかりした。そんなとき祐天上人の噂を聞いた。義真は藁をもつかむ気持で祐天上人を尋ねた。そしてこれまでのことを物語り、祐天上人にすがった。

かわいそうに思った祐天上人は、自分が手生身につけていた袈裟と数珠を義真に与えた。喜こんだ義真はさっそく袈裟を着し、数珠を手にして礼拝すると、不思議なことに仏像を拝むことができた。そこで義真は、今まで首を切った数千人々のために、自分の屋敷の奥に供養塔を建てて追福した。また伝通院開山堂の西後にも千人の供養塔を建てた、と記されている。

事実は西信寺に建立した供養塔を伝通院に移したものである。それにしても祐天上人は不思議な力の持ち主で、多くの人々から尊敬され、念仏の功德を分ち与えたことはいうまでもない。

私が伝通院の供養塔にお参りしたのは、暑い日の午後であったが、まだ線香がともっていた。有縁の人でもお参りしたのであるうか。今でも供養におとずれる人々のいることを知り、ほっとした気持ちで寺を後にした。